

中世のトップリーダー

～甲斐の国、その素晴らしい文化～

日時：平成21年3月7日（土） 13:00～14:30

会場：アルカディア市ヶ谷

講師：筑波大学教授 守屋 正彦氏

中世の甲州力 トップリーダーの活躍

壬生忠峯や凡河内躬恒ら歌仙が滞在した甲斐の国は、古代に、日本武尊が「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」と歌い、火焚きの翁が歌を返した「連歌発祥の地」である。古今集の賀歌「志保の山」は都人に親しまれ、遙か遠くより歌の地を想い、硯箱、手箱、文台、太刀拵えなどに見られる蒔絵意匠(図1)の傑作が中世には数多く制作された。

平安後期には清和源氏が土着。三組の阿弥陀三尊像(葦崎、願成寺ほか)が武田氏領に、安田氏の奉納になる大日如来をはじめとする密教像が塩山放光寺に伝えられ、優れた京文化の受容が認められる。中世に入ると鎌倉往還を通じて禅宗がいち早く流入し、塩山向岳寺には国宝の「達磨図」(図2)が伝来し、わが国禅宗の幕開けを飾る象徴的な逸品として貴重である。その頃、元寇を予感し、「立正安国論」で警鐘を鳴らした日蓮(図3)が身延に草庵を開き、以後その地に築かれた久遠寺は聖地として信仰されていった。

南北朝にさしかかる頃、甲斐出身の夢窓国師(図4)とその法嗣たちがわが国の禅宗の体制を確立していく。足利尊氏とともに京都の南禅寺、天竜寺、相国寺などを拠点に、諸国に安国寺を置き、古代の国分寺のような布教機能を整備した。甥である春屋妙葩(図5)はさらに京都の五大寺院を束ねて五山文学を興隆させ、禅籍を出版して布教に努めたのであった。その五山文化を芸術の粹に高めたのは竜湫周沢(武田氏)、義堂周信、絶海中津など恵林寺ゆかりの禅僧たちであった。

また甲斐は東国において仏教文化の交差する要衝であった。西天目といわれる丹波の高源寺とともに山岳禅の拠点が形成され、東天目大和村栖雲寺にはわが国有数の質の高い普応国師の肖像彫刻(図6)が伝えられた。時宗もまた優れた肖像彫刻を遺し、甲府一蓮寺は最高位である遊行上人を数多く輩出し、優れた往時の文化を今に伝えている。

武田家のもとで篤く保護されて花開いた仏教文化。甲斐出身のトップリーダーがわが国の中枢で活躍した時代であった。



図1. 塩山蔭絵硯箱

「志ほの山さしての
いそにすむちとり」
古今集の賀歌を主題とし
た蔭絵の傑作。

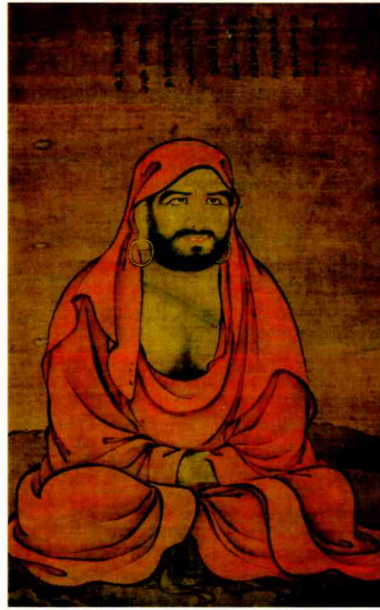


図2. 国宝達磨図

(塩山、向岳寺)

蘭溪道隆は甲斐に滞在し、早くから臨濟禅の拠点形成が行なわれた。



図3. 日蓮上人像

身延に総本山久遠寺のある日蓮宗。宗祖日蓮は「立正安国論」を著して元寇を予言し、襲来した年に身延に移住。晩年をこの地に過ごした。



図4. 夢窓国師像

足利尊氏とともに日本的な禅宗を打ち立て、諸国に安国寺を建立。法嗣には春屋妙葩、竜湫周沢、絶海中津らがあり、彼等は京都五山の中心で活躍した。



図5. 春屋妙葩像

夢窓国師の甥。甲斐の人。禅僧の最高位である初代僧録となり、五山文学を興し、禅籍を多数出版。日明貿易の折の幕府外交顧問となった。



図6. 普応国師座像

天目山栖雲寺安置。開山の業海本浄が中国天目山に普応国師を訪ね、帰国後遠溪祖雄が丹波に開いた高源寺とともに東西の山岳禅の拠点を開いた。